
現実世界と平行世界

小来栖 千秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実世界と平行世界

【Nコード】

N9359Y

【作者名】

小来栖 千秋

【あらすじ】

「全てを話して、あなたは信じてくれる？」

リアルワールド バラレルワールド

現実世界と平行世界が存在する世界で、一人の少年が世界の交錯に巻き込まれる。少年は元の、自分の世界へ帰ることができるのか？二つ存在する世界の真実は？二つの世界を守るために、戦おうとする少年へ逃れられない影が忍び寄る、バトルSFファンタジー。

あなたは、どちらの世界がリアルだと信じますか？

序章 交わりの始まり

†

世界は今を生活している現実だけだと、どうして言えるだろうか。選択を迫られた一点から、それぞれに枝分かれした世界がないとどうして言い切れるだろうか。

そのような世界は存在しえるかもしれない。

それらを確認する術はないが、それらの世界が交われれば、それが証拠と成りえるのではないだろうか。

そう思ってしまうのだ。

いつか複数存在する世界が交わる時が来たとして、人間はその世界の存在をどのように捉えるのだろうか。

肯定するだろうか、否定するだろうか。

いや、そもそも共存できるのだろうか。

それらの杞憂はその時が来てみなければ分からない。

しかし、人——あるいは世界は寄り添いあって生きていくことが出来ると思うのだ。

序章 交わりの始まり？

太陽が沈んだ街の夜はそれほど数メートル先の世界が分らないというほどに暗いことはない。

しかし、どんよりとした厚い雲が空を覆っているため、夜空に輝いているはずの月や数えきれない数の星たちはその姿を隠している。普段はそれらの輝きで夜の街は照らされている。夜の街を照らす街灯の明かりがあるとはいえ、月や星の輝きがないことはどこか心を不安定なものにする。

そのような夜の街には硬質な質感を与えてくる建物が均等な距離を保って、連続で建てられている。それらの建物を地上から見ると、壮観であり圧迫感が身体を恐怖させる。

夜の街には人がいる気配がまるでしない。

建物の窓には明かりが灯っており、わいわいと賑やかな声が今にも聞こえてきそうだが、それらの声も街灯だけが虚しく照らす街の雰囲気すぐに消されてしまう。

「はあはあ……」

その建物が建ち並ぶ圧迫感が溢れる街を必死に走っている人影がある。人影は、どこまでも続くかのような建物の間を縫って行く。

街の街灯に照らされるその人影はどこかの学校の制服を着ているようで、走っている姿をよく見れば、成人していないようにも見える。

（まだ追いかけてきているか……）

人影は走りながらも、自身の後ろを振り返る。走っている人影は、誰かに追われているかのように必死だった。

視線を前に戻し、さらに先を急いで、人影は走っている足を止めない。荒い息遣いだけが木霊するのは、現代ではとても考えられない。しかし、実際に周囲からは他に音も聞こえてこず、人影は自分の走る音と呼吸の音だけの街を走っていた。

（出来るだけ遠くへ——）

その一心で、人影はどこまでも走り続ける。
そこへ、

「いつまで逃げるんだよー、ユウキ——っ！！ さっさと観念するんだなあ——っ！！！」

周囲への騒音を顧みない大声が響きわたる。その声はスピーカーを介して、街中に届いているのではないかと思うほどに大きい。

「はあはあ……」

（ち……っ、もう追い付いてきやがった——！？）

聞こえてきた声は硬質感漂う街を走っている人影——ユウキを追いかけている。ユウキは追ってきている声の主たちから逃げているのだ。

（なんで追ってきてんだよ……っ！？ たく——っ！）

ユウキは自身が追われている理由を知らない。思い当たる節はあ

るにはあるが、それを確認している暇はない。

「見つけたぞ——っ！」

「な……っ!？」

一直線に大通りを走っていたユウキに対して、大通りと繋がっている右の道から現れた全身を黒い防護スーツで覆っている追手の男たちがライフルを発砲してくる。いきなりライフルで撃たれるユウキだが、咄嗟に大通りに路上駐車されている自動車の陰に隠れる。

「ぜえぜえ……。くそ——っ」

(街中で銃連射とか止めるよな……)

そう、見つかると問答無用に銃で狙い撃ちにされるのだ。その度に、ユウキは自動車や建物、街路樹の陰などに隠れている。追われているユウキは発砲音に気付いた誰かが、警察に連絡してくれることを祈っているが、周囲には明かりの点いている窓が見当たらない。周囲の建物がマンションから雑居ビルに変わっていたのだ。

「ち……っ! 周りこめ!!」

ユウキが自動車の陰に隠れたところをみた追手の一人は、ついてきている仲間に指示を出す。その指示を聞いた仲間は、迂回して挟み打ちにしようとしているみたいだ。

(向こうは複数か……。正確な数が知りたいな……。てか、捕まえる気なのか、殺す気なのかも分かんねえ……)

「ただやられるわけにはいかない、か——っ!」

じつと隠れているユウキはこのままではやられるだけだと判断して、追手の何人かが大きく通りを迂回しているスキを見て、残った追手の男たちに突撃を行う。

「な……っ！」

（残った追手は五人——か！）

自動車の陰からいきなり飛び出してきたユウキを見て、追手の男たちは一瞬ひるむ。その一瞬をユウキは見逃さない。

「ふ……っ！！」

「が……っ！？」

短い呼吸を吐いてユウキは追手の男の一人を飛びあがったの回し蹴りで吹き飛ばす。大の大人を吹き飛ばすほどの蹴りの威力はとも成人もしていない少年の力には思えない。

しかし、吹き飛ばされた男が、街路樹にぶつかりそのまま気絶したのを見る限り、ユウキをただの少年と思うことはできなかった。

「なっ！？ こ、こいつ——っ！」

「くそがきがああああっ！」

仲間がやられたことに激昂した男たちが照準も定めないままライフルを発砲する。

「げっ！？」

近距離で撃たれた弾丸はユウキの急所に狙いが定まっていなかった

たが、流れ弾がユウキの左肩をかすめる。

「ぐう……」

かすめただけだったが、そこから裂けた制服の肩口から血が流れる。その痛みを感じた瞬間にユウキは一度追手の男たちから距離を取る。

（迂回してる連中がもう少しで、後ろの通りから出てくるか……。さっさと片付けないと――）

そう焦るユウキだが、実弾を使う相手をさっさと片付けることは容易ではない。突撃も追手の一人を倒すことしかできず、すでに一度してしまったためにもう一度突撃を行ってもそれほど効果はないだろう。何よりもカウンターを受けやすくなる。それが拳ではなく銃弾なので、常套手段とするべきではない。

一度距離を取ったユウキを追撃するように、追手の男たちは発砲してくる。その追撃も、ユウキは通りに面している建物の陰に隠れてやりすごす。これで前方からの銃撃は凌ぐことができるが、後方からは格好の的になる。

（さて、どうする――）

ほんの一瞬の間に、ユウキは思案を巡らせる。そして、すぐ行動に移す。

「いつまでも隠れてられると思うなよ――！」

ユウキが先ほどまで逃げていた方向である前方からは追手の男が四人いて、建物の陰に隠れているユウキを狙って何度も銃撃を繰り返す。

返している。

さらに追手の男たちのうち数人が、ユウキを挟み打ちにしようと大通りを迂回しているだろう。そちらの数は把握していないユウキだが、そのことは気にも留めていない。

「そんなこと全く思っただけよ」

追手の男の挑発に乗るように、ユウキは躊躇なく隠れている建物の陰から出て、一気に大通りに反対車線まで走る。

「逃がすかあ！」

その行動を見た追手の男たちはユウキを逃がさないように追いかける。

（やはりついてきた。これで――）

建物の陰から飛び出したユウキは歩道から車道に飛び出し、街路樹を飛び越えて反対車線の歩道まで辿りついた。

「はあはあ……、ぐ——っ!？」

街路樹を飛び越えた後の着地の衝撃で、銃弾がかすめた左肩の傷に痛みが走る。

しかし、その痛みには蹲っている場合ではない。視線を上げたユウキは、目の前にある建物の入り口のガラスを突き破るようにして中に入っていく。

「な!？ あ、あいつ——」

追手の男たちは、ユウキが入っていった建物を見て、驚きの表情を見せる。

その建物は銀行だった。

序章 交わりの始まり ？

銀行の入り口を突き破って入ったユウキは、明かりが消されている一階の受付を見渡している。無論それは銀行強盗しようとか金庫を探そうとしているわけではない。

（銀行や金融機関には必ずあるはずだ——っ）

ユウキが探しているものは別のものである。

目的のものを探そうと本来なら銀行職員が入る受付の奥まで、ユウキは並べられている机を飛び越える。

「どこだ……！？」

躍りになって探しているところに、

「俺たちを銀行強盗にでも仕立て上げるつもりかあ！？」

追手の男たちが銀行の中へ入ってくる。

（こいつらも躊躇なしか——！！）

銀行のフロア内に現れた追手の男たちを見て、ユウキはすぐに飛び越えた机の下に隠れる。そのコンマ数秒後に、けたたましい音とともにライフルの火がふく。

「くそ……っ」

容赦なしの銃撃が銀行のフロア内に響きわたる。その銃弾は銀行の受付内の机や椅子を貫通していき、壁に設置されているロッカーにも穴をあけていく。

（まずいな——）

銃撃が止むまで机の下から出られないユウキは、身動きがとれない。このままではじり貧であり、男たちもユウキ同様に机を超えて狙ってくるだろう。

この危機的状況を一発解消するために、ユウキは目的のものを探す。

（ドラマや映画なんかじゃ、よくこの辺りに——）

頼りない知識ではあるが、あてもなく探すよりはマシだろうとユウキはフロアを区切るように長く設置されている机の下を這って進みながら探す。這って進むユウキの後ろには、肩から流れている血の痕が残される。

その間もライフルの発砲音は止まらない。

「……？ あいつ移動してるぞっ！」

何度銃撃を行っても反応がないことに気付いた追手の男の一人が、机を飛び越えて銀行の受付内に行こうとする。

（げ……っ、ばれたか——）

なるべく物音をたてないように慎重に進んでいたことが逆に男たちに気付かれる要因になってしまった。

（こつなりややけくそだ——）

どちらにしろ追手の男たちも机を飛び越えてくるだろうと判断したユウキは、机の下を這って進むことを止めて立ち上がる。

「いたぞ——っ!」

当然追手の男たちにはすぐに気付かれるが、ユウキは気にしない。立ち上がってそのまま受付の長い机を並走する。そして、机の下に手を当てて、目的のものを手探りで探す。

「待てえ!」

そのユウキのすぐ後ろを、受付の机を飛び越えた追手の男が追いかけている。振り返ってその様子を確認したユウキは、さらに走る速度を上げる。

「くそ、こいつ速い——」

銀行の入り口付近でライフルを構えている男たちは仲間にあたることを考慮して、発砲することが出来ないでいる。

（今のうちに見つけないと……）

そう焦るユウキの左手が、机の下の出っ張っている何かとぶつかる。

「……っ!？」

それを感じてユウキは立ち止り、急いで机の下を確認する。

（あつた——）

そこにはユウキが探していたものがあつた。

ユウキが探していたものは、外へ緊急の連絡ができ、ブザーを大音量で鳴らす『非常ボタン』であつた。

（金融関係には絶対にあるもんだろ、これ——）

目的のものを見つけたユウキは、それに飛びかかるようにしてボタンを押そうとする。

「……？ な——っ！？ やつをとめろっ！！！」

それに気付いた追手の男の一人が叫ぶ。

「ち……っ！」

気付かれたことにユウキは舌打ちをする。その背中に受付の机を飛び越えた男が飛びかかって抑えようとする。

（やば——っ）

捕まる。

そうユウキが思った瞬間、銀行のフロア内に強烈な風が銀行の入り口のガラスや窓ガラスを割って吹き荒れる。

「な……っ！？」

いきなり吹き荒れた強風に追手の男たちは、建物内の壁まで吹き

飛ばされる。ドガツという大きな音とともに男たちは壁に衝突し、そのままずるずると床に倒れていく。

「はあはあ……」

（やつとか——）

強風に吹き飛ばされて気を失った男たちをユウキが一瞥している
と、

「ユウキ——!!」

声がかけられる。そちらを振り返ると一人の少女が立っていた。
少女の名前はミユキ。

肩を少し超えるほどに伸びたストレートの髪が驚くほどに綺麗な
黒色で印象的なユウキの幼馴染みである。

「間に合ったみたいだね——」

「ぎりぎりだけだな」

「仕方ないでしょ。連絡きたのお風呂入ってたときだったんだもん
——」

さきほどの強風によって割れた銀行の入り口のガラスを踏みしめ
て、少女——ミユキはユウキのもとへ駆け寄って言う。その言葉は
間違いではなさそうで、タンクトップの上に薄いカーディガンを羽
織り、ショートパンツを履いているだけの服装から覗いている肌は
少し火照ったような色合いをしている。

「なるほどね……」

そのミユキの肌を見て、おもわずユウキは視線を逸らす。

「連絡をくれてからどうだったの？」

「どうも……。喫茶店で別れてから、ずっと追いかけてるんだよ。もしかしたら、喫茶店から張ってたのかもな」

ユウキがミユキに連絡を入れたのはこの逃避行が始まったすぐであり、もう三〇分以上も前のことだ。その後からの状況をミユキに説明する。

「追ってきているのが誰か分かってるの？」

「いや、分からない。俺を捕まえようとしているのは分かるが、何が狙いなのかもさっぱりだ」

追われているという現実是不変変わらないが、その理由はユウキにも分からない。

「ともかく、追手きてるのはこいつらだけじゃない。さつきスピーカーカーでこいつらのボスみたいなやつが叫んでたから、まだ油断は――」

そこに再び声が聞こえてくる。

「その通り。まだお前を捕まえるのは諦めてはおらんぞ？」

それはまたしてもスピーカーカーを介して聞こえた男の声だった。

「……っ！？」

聞こえてきた声に、ユウキは敏感に反応する。どうやらスピーカーの声の男は、銀行の外からこちらの様子を窺っているようだ。

「さっさと出てこい！ お前は袋のねずみだぞ？」

スピーカーから聞こえてくる音のほかに、ユウキはエンジン音が紛れていることに気付く。

（車……？）

「どうするの？」

「何が目的かは分からないが、捕まる気はない。逃げよう！」

「どうやって……！？」

銀行の入り口は別の男たちに抑えられているだろう。すぐに突入してこないのは、こちらを警戒しているからだろうか。

「裏口があるはずだ。あいつらを牽制するためだ。もう一発頼むよ、ミユキ！」

「しょうがないなあ、もう——」

ユウキの言葉の意図を理解したミユキは、銀行の入り口へと向き直る。

その瞬間、またしても強風が起こる。その強風は銀行フロア内の机や椅子を持ち上げ、そのままユウキを捕まえようと追っている男たちがいる外へと吹き飛ばす。次の瞬間には、その机や椅子やらが風とともに襲いかかってきたのを見た、男たちの悲鳴が夜の街に響きわたった。

「さ、今のうちに行こう！」

そう言って、ミユキは振り返る。

「ああ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9359y/>

現実世界と平行世界

2011年12月1日18時46分発行